

江藤淳の「保守主義」について

—〈昭和ひとけた〉論序説—

松 井 邦 子

はじめに

敗戦後五十年余り、昭和の終焉から十余年の現在、経済不況、政治不信、教育の荒廃など、ネガティブな評価ばかりが日本社会を覆うようになっている。立場の違いはあれ、おそらく人々の危機意識は強い。しかし、そうした状況であればこそ、現状への不満や怒りを戦後社会の全否定へ短絡的につなげることも、反省なしにその全否定を拒否することも、決して有意義な態度ではない。現在に対する切迫した問題意識が生じるときはまた、現在に立ち止まって、来し方行く末を改めて客観的に考えることができるチャンスでもある。

本稿はささやかながらそのチャンスに挑みたいという意図の下に執筆される。ここで扱われるのは一人の文芸批評家、江藤淳の「保守主義」の思考である。彼の思考様式とその内実の検討を通して、戦前と戦後の断絶と連続を見出し、それが現在へといかに帰結するかを考察することが本稿の目的である。

検討は次のように進められる。まず江藤淳の代表作の一つであり、彼の「保守主義」の出発点とされる『成熟と喪失—“母”の崩壊—』をテキストに、近代日本社会を江藤がどのように認識していたか、その認識にもとづいて江藤が求めた理想の社会原理がどのようなものであったかを析出する。この過程で、彼が「保守主義」を標榜した必然性が見出されるであろう。通常、江藤の「保守主義」の淵源を彼の北米体験に求める論者が多いが⁽¹⁾、本稿はこれを彼の〈昭和ひとけた〉経験に帰し、この経験こそが江藤の「保守主義」の要であるとともに弱点でもあったことを明らかにする。そして最後に、彼の「保守主義」がどのような形で後続世代に継承され、現在の問題と関わるかを総括する。

一、「治者」の不幸

『成熟と喪失』は、周知のように二年間の北米体験⁽²⁾の後に書き上げられ、それまでいわゆる左翼的な「戦後知識人」の共鳴者、或いは同伴者であったはずの江藤⁽³⁾が、「転向した」と見なされることになった作品である。言わば、自他ともに認める江藤の「保守主義」の出発点にほかならない。文学史的に「第三の新人」と呼ばれる作家たちの作品を媒介に論を進めるこの著作には、「かなり図式的なところがあり、(・・・)強引で性急な統

一化の手つきがとくに後へいくほど感じられる。つまり原理性を貫徹しようとして（・・・・）論理の空転がみられる」⁽⁴⁾が、逆にその結果、江藤がいかなる「原理性の貫徹」にこだわっていたかが明確に浮かび上がっている。

江藤はまず、人間はいかにして人間になるかを考察する。江藤によれば、人間は「成熟」して自由な個人となるが、「成熟」とは「なにかを獲得することではなくて、喪失を確認すること」⁽⁵⁾と同義であり、『自然』のなかでではなく、『社会』というもののなかで、つまり人と人との間で生きて行かなければならぬこと⁽⁶⁾の自覚でもある。江藤は、しかし日本社会にはこの「成熟」がないとし、アメリカのフロンティアを担った「放浪するカウボーイ」⁽⁷⁾のイメージを対置させながら、日本社会が「成熟」を拒否する理由を明らかにしようとする。

日本社会は、農耕文化の伝統の下にある社会である。定住して田畑を守る任務を課せられる農耕民の息子は、「母に対するように密接に血縁とつながり、母に対するような濃い情緒で大地に結びついていなければならない」⁽⁸⁾。彼の生きる世界は「自然」の世界であり、これを支配するのは「自然」の原理、すなわち産み出し育てるものとしての「母」の原理である。対して「放浪するカウボーイ」たちは血縁を離れ、大地にも定着せず、「孤独な『個人』として西のフロンティアに出発するが、その私的な歩みはそのまま合衆国という『国家』の版図拡張という公的目的につながっている」⁽⁹⁾。彼らを支配するのは社会、或いは「国家」の原理、すなわち「公的目的」のような規範を示す「父」の原理である⁽¹⁰⁾。この対比から江藤が導き出すのは、「母」の原理という自然的関係に生き続けるかぎり「喪失」するものではなく、したがって「成熟」はありえないということ、人は「母」を「喪失」して「父」になってはじめて「成熟」するということである。だが、注意しておかなくてはならないのは、江藤がここで欧米的な「父」の原理に生きる「カウボーイ」にも、必ずしも「成熟」を認めていないことである。後に詳述するが、「母」の原理を析出するために欧米的な「父」の原理を対置させながらも、江藤が「成熟」の先に想定する「父」の原理は欧米のそれとはずれているのである。

さてこうした「母」の原理にもとづいていた日本社会は、第一の近代化 — 明治維新後の近代化政策 — によって、欧米社会的な「父」の原理を内面化した。「日本の『近代』は、学校教育制度の確立というかたちで階層のあいだの壁をとりはらい、『教育』によって『出世』する道を開いた。（・・・・）日本の『近代』は学校教育制度を導入することによって、大草原の彼方ではなく男たちの心の中にひとつの『フロンティア』を開いた」⁽¹¹⁾。しかし、日本社会の近代化がもたらしたのは「母」のもとにとどまり続ける息子たちであった。

「学校教育制度」が開いたフロンティアは、たしかに息子たちが「父」を越える可能性を開いた。「学校教育制度」による「出世」が国家政策である以上、そこに身を投じて生き

ることは国家という「父」の原理の下に生きることを意味する。しかし「出世」の可能性は同時に絶えざる競争の発生であり、社会的優劣、自他の比較を生じさせる。したがって国家社会の「父」の原理に忠実であればあるほど、実在の「父」たちは競争のあからさまな結果を負わなければならない。現在より上、現在より先があるかぎり、実在の「父」たちは「父」の原理が支配する世界での敗北者となる。この「父」を前にして、息子たちは目指すべきイメージを持ち得ようはずがない。「父」となって「父」の原理に生きるためには、同じ原理の下に生きている「父」を否定しなければならないからである。

「静的な文化の中では、いわば父親そっくりに子どもを育てること」⁽¹²⁾がつとめであった「母」たちの変化も、この状況を正確に反映する。「母」たちは「父」の原理の下で、息子たちを「出世」のフロンティアへ送り出さなければならない。息子が「出世」してくれれば、敗北した「夫」が与えてくれなかった優越感を満たされ社会的な勝利を得ることができる。しかし同時に、それは自立という名の下に息子を失うことでもある。「出世」と息子の喪失との間で、「母」たちは動揺する。

結果として生じたのは、「母」と息子が「緊密ななれあい」⁽¹³⁾を続ける世界、「喪失」されるものがなく必然的に「成熟」もない「肉感的な世界」⁽¹⁴⁾であった。自立を拒否し、「母」の原理が支配する自然的な関係に生き続けるなら、「母」も息子もともに「父」の原理に生きる矛盾を直視しないでいられるからである。したがって「父」の原理を生きることによって敗北し続ける「父」は、当然のことながらこの世界から外される。「学校教育の確立と同時に、『父』は多くの『母』と息子たちにとって(……)『恥づかしい』ものになった」⁽¹⁵⁾。むろん、ここには大きなねじれが軋み続けている。なぜなら「母」と息子の小宇宙は、近代産業社会のなかでは「父」が賦与する経済力という基盤なしには成立しない。恥じられ外される〈不在〉を通して、皮肉にも「父」は「母」と息子の世界を支える「父」の原理の「権威」を示しているのである。

「母」と息子の小宇宙が破られるのは、「敗戦」という第二の近代化によってである。「敗戦」は社会、国家レベルの「父」の原理を打ち壊した結果、その原理に生きて「父」たちが示した「権威」をも崩壊させた。「父」の崩壊は、必然的に「父」に支えられた「母」と息子の世界の崩壊である。江藤が副題に掲げた「母の崩壊」という言葉は、したがって二重の意味を帯びている。では〈不在〉によって「権威」となり得た「父」が失墜して現前したとき、息子たちは「母」との世界が失われゆくなかで、遂に「成熟」しえたのだろうか？

この第二の近代化による「母」の崩壊を、「成熟」のチャンスとして江藤が把握していることは間違いない。だが江藤の思考はここでも微妙である⁽¹⁶⁾。「敗戦」は「父」を崩壊させているからである。「敗戦」とともに新たな近代化を強いて登場した占領軍、まさしく「カウボーイ」たちは一時的に「父」の原理を代行する。「しかし、占領が法的に終結したとき、日本人にはもう『父』はどこにもいなかった」⁽¹⁷⁾。「今や日本人には『父』もいなければ

『母』もいない⁽¹⁸⁾。「母」の崩壊を受けて「成熟」しようにも、いかに「成熟」すべきかを示す「父」もいない。息子たちはそのなかで、何かに向かって「成熟」しなければならないのである。

「父」がいない今、もちろん江藤は「父」になれ、と答えることはできない。江藤の解答は『『隠れ場所というものがない』禿山の上に『全身をさらす』のに等しい⁽¹⁹⁾』状態に立ち尽くしながら、そのような状況を引き受け、あたかも権威を支えられた「父」であるかのように生きよ、というものである⁽²⁰⁾。保護する「母」も権威を与える「父」もないまま、「父」であるかのように意志的に生きようとする姿勢を、江藤は「治者」と呼んでいる。すべてが崩壊した世界で、「治者」たるべく生きることは、悲壮で不幸な決意である。それでもその『『治者』の不幸⁽²¹⁾』に生きる姿に、江藤は日本社会の「成熟」の契機がある、というのである。だが、「父」なきあと、「父」のように生きるとは、いったいどのようなものとなるのであろうか？そこに働く原理とは何であらうか？

二、「治者」という生き方 — 「父」なきあとの「父」の原理 —

『『治者』の不幸』な生き方を自覚できたとき、それは「前人未到の難問」⁽²²⁾を引き受けることでもあると江藤は述べている。たしかに、江藤の言う「治者」は、これまでになかった事態を負わなければならないだろう。一切の原理は失われており、しかもすでに指摘しておいたように、「カウボーイ」たちの「父」の原理を持ち出して「成熟」を説明しながら、江藤は彼らにも「成熟」を認めていない⁽²³⁾。江藤によれば、「カウボーイ」たちは「母」から離れて放浪に出るが、つねに「母」を恋う郷愁の痛みを抱き続ける。この痛みを抱いている限り彼らは「子」であり続け、言わば「子」のまま「父」になってしまうというのである。したがって「治者」という生き方の原理は、従来の日本社会の原理にも欧米流の「父」にも拠ることができない。

それにもかかわらず、「父」が崩壊してなお、「父」のように生きなければならないと言う以上、江藤には崩壊せざる「父」の存在、新たに発見され直すべき「父」の原像が想定されていることになる。『『第一次戦後派』の作家たちは、『父』の実在を前提として、『父』に反抗する『子』として書き続けたためにおそらく現実を遊離したのである』⁽²⁴⁾と江藤は書く。こうした分析を可能にするのは、「母」と息子の世界が「父」を外して不在化させる以前に、「父」を実在として感覚できる世界があったという江藤自身の前提である。すべてが崩壊した状態に日本社会と日本人が立たされているという認識に立ったとき、採りえた道はおそらく二つしかなかった。一つは〈かつてなかった原理〉の創出であり、もう一つは〈かつてあった原理〉の回復である。江藤が採ったのはすなわち、後者の道であった。

日本社会の伝統が農耕社会の「母」の原理だと論じておきながら、そこに「父」を呼び込むために、江藤は巧妙に別な伝統が存在したことを示そうとする。「母」の原理を象徴する

「地」に対する「天」の思想、すなわち儒教イデオロギーの存在である⁽²⁵⁾。産出する「自然」、「大地」という「母」に「季節」という規範秩序を与える「父」としての「天」の思想が、農耕社会に従事し「母」の原理に生きる人々の思想と相補的に、「『政ヲ為ス』者の思想」⁽²⁶⁾、すなわち「武士階級の公私の生活の機軸」⁽²⁷⁾として存在していたと江藤は説明する。「『政ヲ為ス』者」、すなわち支配者は超越的な「天」の意志によって支配の権能を与えられたものと自らを見なし、その崇高な任務を徳をもって遂行する責任意識を負わねばならない。中国にあって「士大夫」の思想であったそれは、江戸期になって「士大夫」に相当する武士階級の思想となった。ここに江藤は、農耕社会の「母」の原理とは異なる、「父」の原理の伝統を発見する。「母」の背後にその原理としての「自然」があるように、「父」の背後にあって権威の根拠を与える〈超越的なもの〉、すなわち「天」がある。その原理に生きることが「『政ヲ為ス』者の思想」であるならば、もはや明らかであろう。「『政ヲ為ス』者」とは支配し、規範秩序をもたらす統治する者、すなわち「治者」である。「治者」として生きるということは、あたかも「天」を根拠に支配と統治の高貴な任務を負った中国の天子のごとく、〈超越的なもの〉を根拠に秩序規範を担う者として生きることである。

もっとも江藤は、現代の「治者」には権威を与える〈超越的なもの〉がもはやないかもしれない、ということに気がついている⁽²⁸⁾。ゆえに「父」として生きるのではなく、あたかも「父」のように生きる者として「治者」を描いているのである。しかし実はそうであればこそ、それでもなおかつ「治者」を引き受けて生きようとする姿の「不幸」は江藤にとって重要である。「《子曰クワク、政ヲ為スニ徳ヲ以ッテセバ、譬エバ北辰其ノ所ニ居テ、衆星ノ之レニ共ウガ如シ》」⁽²⁹⁾という『論語』「為政篇」を引き、「大空にひろがる星が北極星にむかっておじぎをしている美しいイメージ」⁽³⁰⁾と江藤が解説を加えているのは象徴的である。江藤のいう「治者」の原理とは、「天」の思想という父性原理自体ではない。父性原理の「美しいイメージ」、まさにもはや「イメージ」でしかありえないかもしれないものの、その美しさに生きようとするのが、江藤の「治者」の原理なのである。

これはきわめて近代主義的な美学の一典型である⁽³¹⁾。江藤は「美しいイメージ」という主観的な感情、或いは生き方の美意識を、あたかも〈超越的なもの〉のもとにあるかのように見なしているのである。たしかに、権威を与える〈超越的なもの〉、すなわち確固とした規定的な「父」の原理はもはやありえないかもしれない以上、「父」として生きることができない。残されているのは、あたかも「父」であるかのように生きること、自らの生き方が「父」の原理のもとにあるものと見なすことだけである。この〈見なし〉の構造は、なるほど理論的には規定的原理を持たず、そのゆえに絶えず自らの生き方を〈父のようであるか?〉と問い続けなければならない点で、「禿山の上に『全身をさらす』」ような厳しい生き方になるであろう。しかし同時にまた、〈見なし〉は容易に錯覚を引き起こす。というのも、「父」はつねに〈あたかも・・・かのように〉考えられる抽象的な、逆に言えば空

虚な理念でしかない。「治者」が与えようとする規範秩序を示す根拠が抽象的な、空虚な理念でしかないとすれば、「治者」は自らの経験の域内において得られるものを〈超越的なもの〉として与えるしかないのである。

江藤が「父」を実在として感覚できる世界がかつて存在したことを前提している、と先に指摘しておいた。江藤は自ら「治者」として、その〈かつて存在した世界〉をまさにあたかも〈超越的なもの〉のように前提しているのである。それは端的に言うならば〈明治〉という時代であり、〈明治〉に生きた「父」たちである。さらに具体的には、彼が『成熟と喪失』以後に向かった『一族再会』、或いは『海は甦える』の時代であり、夏目漱石や永井荷風らであった。

『『恥づかしい』夫=父』³² たちが生まれてくる過程を描写するとき、例えば江藤はこう書く。「注目すべきことは、この『進歩』の過程で社会が急激に崩壊して行くということである。いいかえれば、『父』によって代表されていた倫理的な社会が、次第に『母』と『子』の肉感的な結合に支えられた自然状態にとりかこまれて腐蝕して行く。このことは、たとえば『抱擁家族』を、半世紀（つまりおよそ二世代）前に書かれた夏目漱石の『明暗』と比較すれば明瞭であろう。『明暗』の人物たちはみな自分の役割を自覚した、倫理的・知的な人物たちである」³³。漱石がこうした「父」の原理を作品に内在化しえたのは、「彼が江戸時代以来『士大夫』の必須の教養とされた漢学の世界像のなかで育っていたからである」³⁴。江藤によれば、その世界像が「近代」によって突き崩されていくとき、しかしこの世界像を持っていたがために漱石は「超越的な視点の欠落を痛みと感ずる感覚」³⁵を持つことができた。或いは永井荷風にとって生きるということは『『季節』=『天』という男性原理と、『自然』=『地』という女性原理とが、たがいにあい擁してつくりあげている世界』³⁶が喪われていく最後の残像に触れることであり、荷風は「そこでなにが喪われて行くかを明晰にとらえていた」³⁷人だということになる。言い換えれば、漱石にせよ荷風にせよ、江藤にとって彼らは「喪失」を自覚し得た人々、すなわち「成熟」し得た人々であった。言うなれば今や日本社会において失われた「成熟」を、かつて成し得た人々なのである。

こうして、〈かつてなかった原理〉の創出ではなく〈かつてあった原理〉の回復に向かったとき、江藤は「保守主義」を標榜する「保守主義者」として立つことになる。江藤自身がそう主張しているように、日本社会の二つの近代化が「改革」³⁸の名の下に推進してきたものが「成熟」しえぬ人間の挫折となった以上、彼の立場は〈かつてあった原理〉を守る者、「保守」とならざるをえなかったのである。しかしながら、日本近代の挫折を近代的思考の図式をもって越えようとする江藤の「保守主義」は、現在へとつながる根本的な問題を — おそらく彼は自覚していなかった — はらむことになるであろう。

三、〈昭和ひとけた〉という経験

ところで江藤は、先に見たように、「母」に頼って書く「第三の新人」たちが見ていた昭和三十年代の現実、すなわち「母の崩壊」に対して「第一次戦後派」の文学がなすすべもなかった理由を、それが「父」との関係で自己規定した『『理念』の文学』³⁹⁾だからであると評している。『『理念』が敗戦を『解放』とする以上敗戦は敗戦ではあり得ず、それが昭和三十年代に後退しつづければこの現象は単に『反動』の復活とされた』⁴⁰⁾。「当然なことに世界は男だけによってはつくりだされていない。もし『理念』が男性の原理であるなら、『心理』と『感情』は女性の原理とでもいうべきものであろう。(……) 歴史を『理念』の歴史としか見ないのは歴史の半面を無視することになる」⁴¹⁾。「保守」は一般に容易に「反動」へと転化するが、それは空洞化した「理念」に現実と乖離して固着することから生じるといえる。この点で、「山崎のように時代から離れて美意識のなかにたてこもるのではなく、西部のように時代錯誤の逆説を生きることにしかならない」⁴²⁾ ような他の「保守主義者」たち — ここでは山崎正和、西部邁 — と異なり「現実の江藤はそのどちらにもならなかった」⁴³⁾ と評されるように、江藤が「反動」化せずにとどまり得たとすれば、それは江藤が歴史を「理念」としか見ないのではなく、「理念」を補う「心理」と「感情」とを — 少なくとも思考の上では — 持ち合わせていたからにほかならない⁴⁴⁾。

「自分自身にとっても戦後の五十年、片時も忘れずにいた悲しみの根源は、自分が幼少年時代に育った風景が震災によって根こそぎ奪われてしまったという、その一事にあるからです」⁴⁵⁾。阪神大震災で罹災した若い知人が震災に奪われた風景を惜しんでいると耳にした江藤は、共感を吐露したうえでこう続ける。「私にしてもなんで文士稼業を四十年もやっているのかといえば、この失われた風景を想像裡に復元する場所は言語空間の中しかないと思い定めたから(……) 脳裡にまざまざと今も甦るあの懐かしい風景を他の人々と分かち合うためには、もはや文字の助けを借りるしかない」⁴⁶⁾。「失われた風景」を復元するという「我々の世代の経験」⁴⁷⁾、すなわち〈昭和ひとけた〉という世代経験、それが江藤の持ち得た「心理」と「感情」であった。

江藤の言葉を〈昭和ひとけた〉と言い換えて括るのは、江藤が昭和七年生まれであるという事実だけに拠るのではない。〈昭和ひとけた〉世代は、先行の世代とも後続の世代とも異なる或る特殊性を持っている。敗戦をおおよそ十二歳から十五、六歳までの思春期に迎えたこの世代は、戦前の社会に確実に生き始めていた世代である。しかも彼らは教育される年齢であった以上、その社会に何らかの形で否応なしに加担し、したがって敗戦の責任を負わねばならなかった先行世代の経験とは無縁であり、またおぼろな子供の記憶しか持たず人格形成期を戦後社会で送った後続世代とも、社会に対して或る程度まで自覚的であった点で一線を画している⁴⁸⁾。

そういう世代に属して江藤が過ごした「懐かしい風景」とは、まさに『『季節』 = 『天』

という男性原理と、『自然』＝『地』という女性原理とが、たがいにあい擁してつくりあげている世界」、荷風が愛し、その残像に触れることを生きる喜びとした「古典主義的な世界」⁴⁹、江戸情緒の残る戦前の東京の風景であった。たしかに、江藤がどこまで荷風の惜しむ「古典主義的な世界」を感知し得たかはわからない。しかし少なくとも、その世界を惜しむ荷風自身が身を置いていた世界、換言すれば〈惜しまれている世界〉ではなく〈惜しむ者が立っている世界〉を江藤が感じ得たことは間違いない。「私の育った大久保百人町は同じ大久保でも（・・・・）荷風散人とは違って私は一度もわが家の冬の庭に山鳩を見たことはなかった」⁵⁰。「文中にあらわれる『英吉利の老いたる貴夫人ミセスコルクス』とは、（・・・・）カルクス夫人に相違ない。（・・・・）ついでのことながら、筆者の祖母はあたかもその頃東京女学館に在学し、カルクス夫人らの教えを受けた少女たちの一人であった」⁵¹。荷風の描写する風景や社会を、江藤は自らの身近な経験の範囲内に受容しえた。荷風や漱石が江戸の世界像を〈明治〉のなかで持ち得たように、江藤は荷風や漱石の生きた〈明治〉の世界像を〈昭和〉のなかで持つことができたのである。さらにこれを補強したのが江藤の育った「教養のある中流社会」⁵²であり、同じ〈昭和ひとけた〉生まれの作家須賀敦子を評して関川夏央が述べているように「その聡明さと表現力を育てたものはまぎれもなく戦前日本の上流家庭であり、またそこに生きていた戦前の折り目正しい教養であった」⁵³であろう。〈昭和ひとけた〉は〈明治〉の世界像を引き継ぎ得た最後の世代なのである⁵⁴。

こうした「心理」と「感情」を基盤にして、江藤は「保守主義」を語ることができた。もし「心理」と「感情」のみに執着していれば、それはただ主観的美意識に立てこもることにしかならなかつただろうが、江藤は「心理」と「感情」を「理念」のもとにあるかのように見なす立場、言わば「心理」と「感情」を相対化する立場に立つことができた。〈明治〉の世界像の下に〈昭和ひとけた〉の経験を照らして吟味し、その乖離と有効性、喪失と回復を考察することができた。その「理念」だけでなく「感情」だけでもない立場をして、彼は「保守とは感覚である」⁵⁵と言い切ることができたのである。

これは他の「保守主義者」たちに対して江藤が持つ圧倒的な強みである。例えば後続の「保守主義者」、昭和十四年生まれ西部邁と比べてみたとき、それははっきりする。西部には、もはや江藤が持ち得たような「心理」と「感情」に支えられた内実ある「感覚」は持ち得ない。それでも「治者」として生きようとするなら、残るのは空虚な「理念」だけである。例えば、「治者」という生き方の原理を示そうとしたとき、江藤の中にはおそらく「教養のある中流社会」という「治者」に対する「被治者」⁵⁶としての大衆が、荷風が描いたような下町の住人や出稼ぎ者の顔をして、確かな手応えで像を結んでいたはずである。だが、こうした手応えがなければ、「治者」は空転する。「西部さんの本に『大衆』とか『民衆』といった概念がまるで出てこないことには驚きました。（・・・・）現在の西部

さんが一種の頑強な保守性を意図的に強調するのは、あの時代（＝六十年安保の時期……筆者註）に、『大衆』に対する意識が落ちていたことに対するコンプレックスが尾を引いているのかもしれませんが⁵⁷と、やや皮肉まじりに吉本隆明は語っているが、この指摘はあながち外れたものではない。実体のない「治者」はせいぜいくエリートや「知識人」⁵⁸というこれも実体を失った階級観念に置き換えられるしかない。空虚な観念に對置される〈大衆〉も、また実体のない観念的なものにすぎず、これに対する確固とした意識は持ちようがない。そしてむしろ、〈伝統〉も〈歴史〉も観念でしかなくなる。江藤が指摘していたように、「理念」がそのまま現実を離れて持ち越されるなら、それは「反動」となるしかないのである。

江藤の「保守主義」は確実にその意味では「保守」たり得た。しかし他方、他の「保守主義者」たちに対して持ち得た江藤の圧倒的強みこそが、また弱みでもある。その理由を述べながら、最後に江藤の「保守主義」を総括する。

おわりに

ここまで、江藤の「保守主義」が拠って立つ「治者」の原理を明らかにし、それが〈昭和ひとけた〉の世代経験に支えられて成り立つ「理念」であることを見てきた。「治者」の原理が経験的な内実を持つがゆえに、「反動」とはならずにとどまりうることも指摘した。

だが二章で述べておいたように、「治者」の原理は理論的には絶えず〈父たりえているか?〉という自己吟味を要求するものの、「治者」の原理を機能させる〈超越的なもの〉が〈あたかも……かのように〉生きることしか示さない空虚な「理念」である限り、現実には〈……〉に人は自らの反省された経験を当てはめるしかない。それは決して〈超越的なもの〉ではなく、したがって絶対的なものではないのだが、また他に「理念」がない以上、絶対化される危険を回避することも原理上できないのである。江藤が「父」であるかのように生きることを提示したとき、その「父」が〈昭和ひとけた〉の経験を通して見出された〈明治〉であったことは、彼の原理が内在させていた必然の結果であるといえる。〈昭和ひとけた〉における彼の経験が〈明治〉の下に相対化されえても、〈明治〉そのものが相対化される機軸は空虚だとすれば、また江藤はつねに「明治」を絶対化するほかはないのである。

そして、この〈明治〉という「理念」を江藤が〈昭和ひとけた〉経験に立ってこそ持ちえたということは、〈昭和ひとけた〉世代に自己の経験の足場を持たない者にとって、この「理念」は共有不可能なものであることを示している。三章で、この世代経験を他の「保守主義者」たちに対する江藤の圧倒的な強みだと述べたが、「保守とは感覚である」ならば、江藤の「保守」は同じ「感覚」の内実を持たない者にとっては共有の不可能なものである点で、また本来なら避け難い弱みでもあることになる。当然のことながらこの「感覚」は、

時代的、社会的脈絡のなかで変わるからである。

しかしさらに予断を覚悟でつけ加えるなら、江藤の議論が示す圧倒的な強みと本質的な弱みとの間に、原理論では割り切れない戦後の「保守主義」の微妙さがあるように思われる。その微妙さとは、〈昭和ひとけた〉世代の経験が戦後社会に持ち込んだ経験の内包する微妙さでもある。すでに述べた通り、〈昭和ひとけた〉世代は直接の責任を負わずして〈戦前〉を経験しており、なおかつ後続世代に対して〈戦前〉を語ることができる立場にある。彼らの経験した〈戦前〉は、或る程度までは自覚的であってもやはり責任を負わなかった、或いは負うことがまだできなかった世代のものであるが、そうであるがために彼ら自身には先行世代のように失う権威もない。この意味では戦後において彼らの〈戦前〉経験は、極論すれば〈無罪の権威〉たりえたのではないか。「敗戦」を経ていながら、江藤が「治者」の原理の回復に向かうことができたのは、彼がその原理を埋める「心理」と「感情」とともに、この〈無罪の権威〉を持ち得たからではないか。こうして生き延びた〈戦前〉は、後続の世代に「治者」の原理にともなう内実として受容され、〈歴史〉や〈伝統〉として把握されなかったであろうか⁵⁹。〈明治〉の残滓を引きずった江藤の〈昭和〉が、彼がそう考えたほどに調和的な世界であったかどうかという問題を別にして。

いずれにせよ「心理」と「感情」、またそれに立脚する「感覚」は、同じ内実を持たない者によっては、すでに述べたようにまるごと観念化されるしかない。江藤的な「保守」は、共有されるとすれば、それ以外の共有の仕方ができないのである。したがって後続の「保守主義者」の「反動」はまた、江藤的な「保守」の必然的な帰結である。この「反動」が徹底されれば、今度は転倒して実体のない〈歴史〉や〈伝統〉、〈国家〉という観念に合わせて、「心理」と「感情」がねじ込まれることになるであろう⁶⁰。

だがこのような「反動」、そして転倒を迎える戦後の「保守主義」の道は、果して「保守主義者」たちだけのものであろうか？すべての原理が崩壊した後で、江藤が「治者」の原理を〈かつてあった原理〉に求めたとき、実は〈かつてなかった原理〉のほうを求めた者たちも同じ蹉跌を踏まなかったであろうか？真に〈かつてなかった原理〉ではなく、〈かつてなかった『治者』の原理〉が求められはしなかったか？特権を守ろうとする「治者」の闘いと、「被治者」すべてが「治者」になろうとする闘いは、同じ原理の別な側面にすぎない。今やもう、誰も「治者」であろうと「被治者」であろうとも関心を示さないのではないか？そうしたなかで「保守」と「革新」をはじめ、従来の対立軸がことごとく曖昧になっている現在の日本社会の状況は、「治者」の原理の「理念」が遂にその実体のない空虚をさらし出した姿ではなからうか？

凡例

江藤の著作には「」つきの用語がきわめて多い。これに従い、かつ引用、筆者自身の用語、強調に「」を用いると過剰に煩雑でわかりにくくなる恐れがある。したがって、江藤自身が「」を用いた語および著作からの引用については「」を、筆者の用語や強調については〈〉を用いて区別した。

註

江藤の著作からの引用については、当該作品を最初に挙げる際にのみ著者名を記し、以下は必要に応じて引用作品名のみを記した。また頻出する語については、特に引用箇所を示さなかった。

(1) 例えば、以下の通り。

上野千鶴子『『成熟と喪失』から三十年』文庫版解説『成熟と喪失— 母、の崩壊—』講談社学芸文庫 講談社、1993年。

大澤真幸『戦後の思想空間』ちくま新書 筑摩書房、1998年。

柄谷行人『江藤淳論—超越性への感覚』柄谷行人『畏怖する人間』講談社学芸文庫 講談社、1990年。

ただし、このなかで柄谷の「江藤淳論」は異彩を放っている。同じく『畏怖する人間』所収の「二人の先行者—江藤・大江論争について」においてもそうなのだが、柄谷は江藤がつねに「生き生きとした具体性」（柄谷、同書218頁）へ回帰することを評価する観点から、北米体験のみならず江藤の拠って立つ体験総体を見事に射程に入れている。

(2) この時の経緯は「アメリカと私」にまとめられており、確かにこの北米体験が江藤に新たな自覚をもたらしたことは間違いない。あらかじめ断っておくなら、筆者は北米体験に江藤の「保守主義」の淵源を求める議論を否定するのではなく、それに匹敵するもう一つの経験の存在を主張しようとするにすぎない。

江藤淳「アメリカと私」新編『江藤淳文学集成』第5巻 河出書房新社、1985年。

(3) この時期の作品として「奴隷の思想を排す」や「作家は行動する」がある。

「奴隷の思想を排す」新編『江藤淳文学集成』第4巻 河出書房新社、1985年。

「作家は行動する」同上。

(4) 柄谷前掲論文、218頁。

(5) 「成熟と喪失— 母、の崩壊—」新編『江藤淳文学集成』第五巻 河出書房新社、1985年、338頁。

(6) 「成熟と喪失」、339頁。

(7) 同書、327頁。

- (8) 同上。
- (9) 同書、358頁。
- (10) 「自然」と「母」を等置し、その対立項として社会、国家を「父」と規定する図式が妥当かどうかはここでは問わない。しかしこの図式に対し、上野千鶴子はフェミニスト批評の立場で次のような辛辣な批判を浴びせている。「江藤はくりかえし、母性原理を『農耕社会的な』と表現している。父性原理と母性原理とを、牧畜民の文化と農耕民の文化とに結びつけて対比するやりかたは、ほとんど陳腐なものである」。実際、本文でも述べるように、江藤のこの対比の用い方はかなり恣意的なものがある。ただし付言しておけば、上野は江藤の近代社会分析を一貫して高く評価している。上野前掲論文、257頁。
- (11) 「成熟と喪失」、328－9頁。
- (12) 同書、328頁。
- (13) 同書、332頁。
- (14) 同書、330頁。
- (15) 同書、341頁。
- (16) この点について、大澤真幸は、江藤が「母性的な自然との伝統的な関係から離脱して、近代的な大人になる決定的なチャンスだみたいな、そういう考え方をするわけです」とまとめている。事実その通りなのだが、その結論へ落ちるまでの江藤の紆余曲折にはもう少しこだわる必要がある。大澤前掲書、77頁。
- (17) 「成熟と喪失」、400頁。
- (18) 同上。
- (19) 同書、448頁。
- (20) 同書、451頁。
- (21) 同書、448頁。
- (22) 同上。
- (23) 同書、338頁。
- (24) 同書、400－1頁。
- (25) 同書、398頁。
- (26) 同書、399頁。
- (27) 同上。
- (28) 同書、451頁。
- (29) 同書、399頁。
- (30) 同上。
- (31) ここで指摘する江藤の主観的な感情の普遍化、および〈見なし〉の構造は、まさしく

近代美学の祖となったカントの美学理論の構造に、びたりと当てはまる。カント美学の構造については、拙論「『判断力批判』における美感的理念と共通感覚一道徳的対話原理の可能性を求めて―」『倫理学研究』第28集 関西倫理学会、1998年、参照。

- (32) 「成熟と喪失」、332頁。
- (33) 同書、359頁。
- (34) 同書、398－9頁。
- (35) 同書、398頁。
- (36) 同書、425頁。
- (37) 同書、426頁。
- (38) 「日本近代の根底にある『改革』の要請は、宿命的に深刻な矛盾を含んでいた」。
江藤淳『保守とはなにか』文藝春秋、1996年、23頁。
- (39) 「成熟と喪失」、382頁。
- (40) 同上。
- (41) 同上。
- (42) 上野前掲論文、280頁。
- (43) 同上。
- (44) ここで、少なくとも思考の上では、と留保するのは、最晩年の著作『妻と私』、また絶筆となった『幼年時代』を見たとき、江藤その人はやはり男性原理に生きたのだと思われるからである。というよりも、実は「心理」と「感情」が男性原理の下でしかとらえられていないという根本的な問題があるのだが、これはまた別の問題である。
江藤淳『妻と私』「文藝春秋」9月号 文藝春秋、1999年。
同『幼年時代』「文学界」9月号 文藝春秋、1999年。
- (45) 『保守とはなにか』、165頁。
- (46) 同上。
- (47) 同上。
- (48) 〈昭和ひとけた〉というのは、世代を表現する言葉としてよく使われるが、筆者はこの世代が戦後に果たした役割について特に考察の必要を感じており、本文でも述べるように特殊な意味をこめてここでは使用している。この議論にはまた別考を要するが、筆者の現在の〈昭和ひとけた〉定義について、本稿で必要な限りの点を以下列挙し説明を加えておく。
 - ①年齢の限定・・・昭和四年～八年に誕生していること。
 - ②階級の限定・・・いわゆる中流から上流の家庭に育ったか、この階級で受容できた教育程度と同等の教育を受けていること。

①については、本文で述べている。補足すれば、この世代は戦後社会で高度経済成長を経てバブルとその崩壊に至るまで、日本社会の中核を担った世代であり、その生涯は〈昭和〉という時代をほぼ体現している。そして今、バブルをはじめ戦後のつけを後続世代が負わされている中で、すでに第一線を退場しつつあるというのがこの世代なのである。

②これも本文で触れているが、この点は〈明治〉以来の知識階級の世界像や意識との連続性の問題にかかわる。私事で恐縮だが、筆者の亡父は昭和四年生まれの地方の地主階級出身である。戦後、大学時代に反レッド・パーズ闘争に参加し左翼を自認したが、最晩年、〈お父さん、マルクス主義者って言うてるけど違うよね。本当は保守だよね〉という筆者の問いを苦笑して認めるに至っている。いわゆる戦後左翼知識人の典型のような理念を持ちながら、実生活においては「治者」の意識を逃れられないという矛盾した人物であった。この背景には「うちは士族です」という祖母の言葉に象徴される家庭の躰と、自ら漢詩を作れるほどの旧制の教育が大きく影を落としていた。

(49) 「成熟と喪失」、425頁。

(50) 江藤淳『荷風散策—紅茶のあとさき』新潮文庫 新潮社、1999年、300頁。

(51) 同上、283頁。

(52) 同上、258頁。なお、この語は荷風の小説『浮沈』文中から、江藤が引用しているものである。

(53) 関川夏央『『鉄道員』と『ミラノの奇跡』』『追悼特集須賀敦子 霧のむこうに』文藝別冊 河出書房新社、1998年、135頁。

(54) こうした連続に「敗戦」とその後の日本社会の展開が刻んだ断絶がいかに大きいかは、例えば幸田文、青木玉、青木奈緒と、幸田露伴の後裔三代の作品を比較したときの生活感覚や文体の差異からも窺える。付言すれば、青木玉は昭和四年生まれである。

幸田文『父・こんなこと』新潮文庫 新潮社、1956年。

青木玉『小石川の家』講談社文庫 講談社、1998年。

青木奈緒『ハリネズミの道』講談社、1998年。

(55) 『保守とはなにか』、22頁。

(56) 「成熟と喪失」、448頁。

(57) 吉本隆明『わが「転向」』文春文庫 文藝春秋、15頁。

- (58) 西部は「知識人」をこう定義している。「私が知識人というのは、『文化の自律性』（ベル）に多少とも正面から立ち向かう人びとのことである」。そして「伝統の破片を一種相対主義的なやり方で丹念に拾い集める仕方」を自らは選択するが、ともかく現代のパラドックスを明らかにするのが「現代知識人の重要な仕事」であると述べている。だが、その「重要な仕事」のために西部に残されているのは伝統ではなく「伝統の破片」だけなのである。

西部邁『生まじめな戯れ 価値相対主義との闘い』 筑摩書房、1984年、
238— 44頁。

- (59) (48) で述べたように、筆者は昭和四年生まれを父に、五年生まれを母に持ったためであろう、この世代以上の年配者が周囲には多い。ここに共通して見られる興味深い現象がある。〈昭和ひとけた〉は戦前から戦中の体験をよく語りたがるが、それ以前の生まれの人々は、逆にほとんどそれを語らないのである。

- (60) 例えば、現在議論を巻き起こしている反自虐史観派の小林よしのりなどは好例であろう。彼は「民族の誇り」や「正義」という「理念」を先に定立し、そこに美、崇高さや誇りを感じるべきだとするのである。またここには倫理的価値と美的な価値の混同が見られる。

小林よしのり『新ゴーマニズム宣言 戦争論』 幻冬舎、1998年。